

波に乗れなかった。一昨日、こむこむ館のわいわいホールで110分間の講演をさせていただいた。会場に行くと、その場の空気というものがある。自分で希望して参加して下さった小学校と中学校の先生方だった。「あれっ」多少、思っていた雰囲気とは違っていた。

参加者は、広い会場に散らばって座っている。私はというとステージの上にいる。だいぶ距離がある。この会場には昨年度も来ている。そのときの私の任務は、あいさつだった。思えば、このようなシチュエーションで長時間にわたり話すのは初めてだった。

今回は、配布資料の作り方を今までとは変えた。従来は、箇条書き程度の表現にとどめていた。それを、後から読んでもわかるように、コピーをして人に渡しても読んでもらえるようにと、文章表現に変えた。それに加えて、会場には机がない。メモしづらい。できるだけメモしなくても済むようにした。進め方は、資料がメインで、パワーポイントのスライドを補助とした。いつもとは逆である。

結果的に、これがよくなかったのかもしれない。資料に書いてあるとなれば、参加者は下を向いて読んでしまう。私も、資料に書いてあることを読むようになる。改めて気づいた。それは、私の得意なスタイルについてである。その場の反応を見ながら、資料やスライドに則って話す、アドリブが多い。わかりやすさを第一に考えるが、ユーモアを交えながら適度な笑いをとる。準備した内容よりも、アドリブの方がいいことをしゃべっている。こんな感じである。

自らアドリブを出しづらい状況にしてしまっていた。反応がよくないため、適度な笑いがとれない。というか、反応がよく見えなかった。説明しながら自分でも歯切れがわるかった。幸い、目論見通りに、50分で予定していたところまで進んだ。10分の休憩をとることにした。その間に、立て直しを図ることにした。

何を変えたのか。上着を脱いだ。話す場所、私が立つ位置を前にした。少しでも客席に近づきたかった。少しアドリブを増やした。このくらいである。波に乗れないのは相変わらずである。波に乗れないからアドリブも出ない。悪循環だった。参加者の表情や様子を見ながら話すタイプの私にとっては、やや苦しい状況だった。

ただし、こんなことを思っているのは私と、今まで何度か私の話を聞いたことがある方だけかもしれない。“高澤節”“高澤ワールド”“高澤劇場”とはほど遠かった。表現を変えれば、普通と言えば普通である。参加者が、どのように思っていたのかはわからない。自分が客席の方にいたらどうだったのか。やはり、配布資料をその場で一生懸命読んでいたことだろう。

では、どうすればよかったのか。会場には、家人もいた。私の歯切れのわるさ、波に乗れない苦しさを理解していた人物である。彼女に教えられた。「資料を後で渡せばよかったんじゃないの」なるほど。パワーポイントのスライドで進めて、用意した資料は終わってから配布する。確かに、そうすればよかったのかもしれない。

よかったこともあった。珍しく5分早く終わった。時間があれば話そうと思っていたことを切ったからである。その分、質疑応答の時間を長めにとることができた。幼稚園の主任の先生に参加してもらったのもよかった。こんな質問が出た。言語習得能力値は、0歳から6歳がピークということだが、高澤先生は園長として子どもたちにどのような指導をしていくのか。こんな内容である。読解力という大げさだが、ちょうど園児たちの言語習得について考えていきたいところだった。そのため、主任の先生に話を聞いてほしかったのである。

波に乗れないまま終わった感は否めない。一番気にかかったのは、私にオーダーを出してくれた方々の期待に応えることができたのかという点である。人は、自分のためにはたいしてがんばることはできないが、人のためにならけっこうがんばることができるものである。約3か月もの間、準備を進めてきたが、改めて人前で話すことのむずかしさを学ぶことができた。そして、自分のスタイルというものについて考えることができた。機会を与えて下さった方々に感謝である。